

◎報 告

呼吸器疾患及び疼痛性疾患に対する温泉療法の臨床評価

西村 伸子, 寺崎 佳代, 山本 貞枝, 中村寿美江

岡山大学医学部附属病院三朝分院看護部

要旨：1998年1月より12月までの1年間に、温泉療法—主として温泉プール水泳ないし歩行訓練及び鉱泥湿布治療—を受けた158例の入院症例（呼吸器疾患78例、疼痛性疾患64例、その他16例）について退院時に臨床効果を5段階で評価してもらいそれぞれの入院期間との比較検討を行った。対象症例の年齢は70才代が最も多く、次いで60才代、50才代、80才代であった。地域分布では、鳥取県外の入院症例が72.2%を占め、県外である遠隔地としては、岡山県、兵庫県、広島県、大阪府、東京都、神奈川県からの入院が多く見られた。臨床効果は、“非常に良くなった”と、“かなり良くなった”を有効と判定し、その有効率は呼吸器疾患では78.2%であった。一方、疼痛性疾患では、その有効率は50.0%であったが、“少し良くなった”症例を含めると、95.3%、その他の症例は68.8%であった。入院期間別に検討すると、呼吸器疾患では入院1ヶ月で72.7%、2ヶ月では81.8%、3ヶ月以上では76.5%であった。一方、疼痛性疾患では、入院1ヶ月で21.1%、2ヶ月で60.0%、3ヶ月で64.0%であり、呼吸器疾患と比べ、効果出現までの期間がやゝ長く、入院期間が長くなるほど、その効果は高くなる傾向が見られた。

索引用語：温泉療法、呼吸器疾患、慢性疼痛性疾患

Key words: spa therapy, respiratory disease, chronic pain disease

はじめに

当院は昭和14年開設以来、自然環境及び温泉を活かし温泉適応疾患を中心とした診療研究を行っている。温泉治療目的の入院患者は、気管支喘息、肺気腫等の慢性閉塞性呼吸器疾患、リウマチ、腰痛、変形性膝関節症等の慢性疼痛性疾患、その他として脳梗塞後遺症、糖尿病、肥満等に分けられる。温泉療法の臨床効果出現までにある程度の期間を要するという難点がある。反面、薬物療法が長期になるほど副作用の心配が高くなるのに比べて、温泉療法の副作用の恐れは全くなく、長期になるほど効果はよりはっきりしてくるという特徴をもっている¹⁾²⁾。当院で気管支喘息患者に温泉

療法が試みられた当初（1982年度）は、平均入院期間が6、7ヶ月と長期であった。その後治療経験が加わり、3年後の1985年度になると2ヶ月まで短縮され、現在は1～2ヶ月となっている³⁾。

今回は、入院治療により温泉療法の効果をどの程度感じているかについて、患者の印象を中心に、退院時に5段階で評価してもらい、疾患別にそれぞれの入院期間との比較を行った。その結果、呼吸器疾患と疼痛性疾患では、効果出現までの期間に差があることが示唆されたので報告する。

方 法

1. 調査期間 1998年 1月～12月
2. 対 象 上記期間に温泉治療—主として温泉プール訓練及び鉱泥湿布治療—を行った入院患者158例

3. 方 法

- 1) 退院時に患者に温泉治療をうけて、①非常に良くなった、②かなり良くなった、③少し良くなった、④変わらなかった、⑤悪くなった、の5段階で評価してもらい用紙記入及び聞き取り調査を行った。
- 2) 患者の評価とは別に、看護婦により他覚的に、①非常に改善した、②かなり改善した、③少し改善した、④不変、⑤悪化の5段階で評価した。
- 3) 対象患者の評価を疾患別、入院期間別で比較検討した。

①疾患別は気管支喘息、慢性気管支炎、肺気腫等を呼吸器疾患とし、リウマチ、腰痛、膝痛、変形性関節症等痛みを伴うものを疼痛性疾患、糖尿病、脳梗塞後遺症、高血圧症等をその他としてまとめた。

②入院期間は1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月以上で比較した。

4. 結 果

対象患者の背景は、呼吸器疾患78例、疼痛性疾患64例、その他の疾患16例であった(表1)。年齢別では50才未満が35例、60才代が45例、70才代54例、80才代24例であった(図1)。年齢分布を疾患別に検討すると、呼吸器疾患では50才代、60才代及び70才代が多く見られたが、疼痛性疾患では、呼吸器疾患よりもやゝ年齢層が高く、60才代、70才代、及び80才以上の症例が多く見られた。その他の疾患は、すべて40才以上の症例であったが、年齢的特徴は見られなかった(図2)。地域別では鳥取県内44例、県外114例であり、県外の内訳は岡山県33例、兵庫県17例、広島県14例、大阪府、東京都、神奈川県各8例、愛媛県6例、京都府5例その他遠隔地として鹿児島県、福島県か

表1 対象患者の背景

		呼吸器疾患	疼痛性疾患	その他	計
性 別	男	44	26	6	76
	女	34	38	10	82
年 齢 別	10代	2			2
	20代	3			3
	30代	4			4
	40代	2		1	3
	50代	15	3	5	23
	60代	22	21	2	45
	70代	25	24	5	54
	80代	5	16	3	24
県内外	県 内	26	6	12	44
	県 外	52	58	4	114
入 院 期 間	1ヶ月	11	19	2	32
	2ヶ月	33	20	7	60
	3ヶ月以上	34	25	7	66

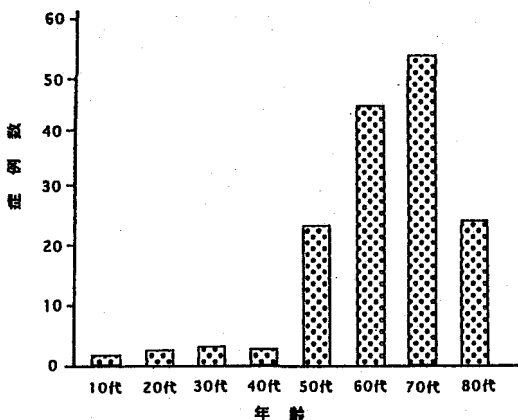


図1 対象患者の年齢別検討

らの来院者もあり全国各地20都府県におよんでいた。入院期間別では、1ヶ月間32例、2ヶ月間60例、3ヶ月間以上66例であった。

次に、臨床効果は、患者による評価では、①非常に良くなった25例、②かなり良くなった79例、③少し良くなった49例、④変わらなかった4例、⑤悪くなった1例であり、看護婦による評価では、①非常に改善した11例、②かなり改善した97例、③少し改善した44例、④不変6例

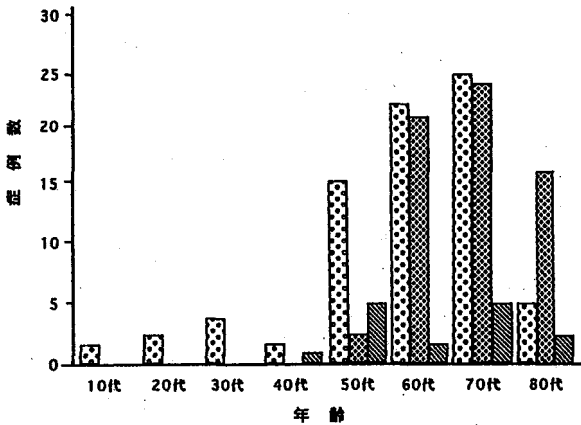





図2 対象患者疾患別の年齢分布

() : 呼吸器疾患, () : 疼痛性疾患, () : その他

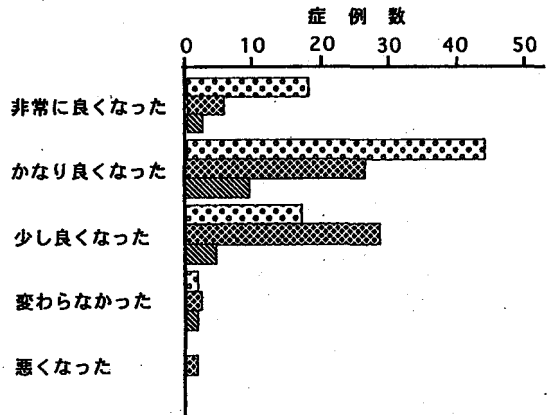





図4 疾患別による臨床的評価 (患者の評価)

() : 呼吸器疾患, () : 疼痛性疾患, () : その他

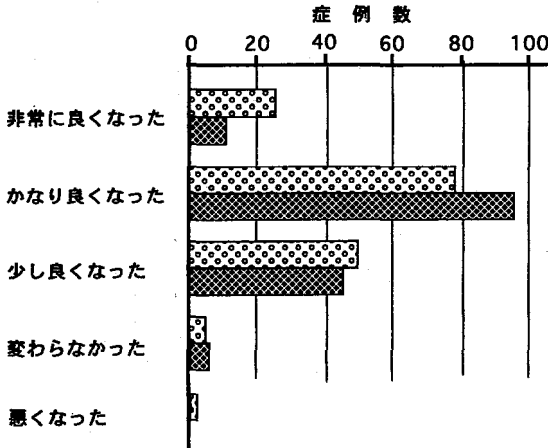




図3 患者と看護婦の臨床的評価の比較

() : 患者の評価, () : 看護婦の評価

であり (図3), ほぼ類似した臨床評価が得られた。上記の患者の5段階評価を呼吸器疾患と疼痛性疾患で比較すると, ①非常に良くなったが呼吸器疾患では18例, 疼痛性疾患では5例, ②かなり良くなったが同じく43例と27例, ③少し良くなったが16例と29例, ④変わらなかったが1例と2例, ⑤悪くなったが疼痛性疾患で1例であり, 疼痛性疾患よりも呼吸器疾患の方が良くなったと感じている割合が多く見られた (図4)。さらに入院期間との関連を比較すると, 呼吸器疾患では1ヶ月間の入院11例中, ①非常に良くなっ

たが3例, ②かなり良くなったが5例, ③少し良くなったが3例, 2ヶ月間では33例中同じく順に7例, 20例, 6例, 3ヶ月以上では34例中8例, 18例, 7例, ④変わらなかったが1例であった。疼痛性疾患では1ヶ月間の入院19例中, ①非常に良くなった1例, ②かなり良くなったが3例, ③少し良くなったが13例, ④変わらなかったが2例であり, 2ヶ月間では20例中同じく順に2例, 10例, 8例, 3ヶ月以上では25例中2例, 14例, 8例, 悪くなった1例であった。このことから, 呼吸器疾患では入院2ヶ月で最も有効と感じており, 疼痛性疾患では効果出現までに長期間を要する傾向が見られた。すなわち, 呼吸器疾患では, その有効率は, 入院1ヶ月では72.7%, 2ヶ月では, 81.8%, 3ヶ月以上では76.5%であり入院2ヶ月でほぼ最高に達することが示された。一方, 疼痛性疾患では, その有効率は, 入院1ヶ月で21.1%, 2ヶ月で60.0%, 3ヶ月以上で64.0%であり, 呼吸器疾患に比べ効果出現までの期間がやゝ長く, また入院期間が長くなるほどその有効率は高くなる傾向が見られた (図5)。

5. 考 察

慢性閉塞性呼吸器疾患の温泉療法として従来より温泉プールでの水泳ないし歩行訓練, 鉋泥湿布療法及びヨードゾル吸入療法の組み合わせによる

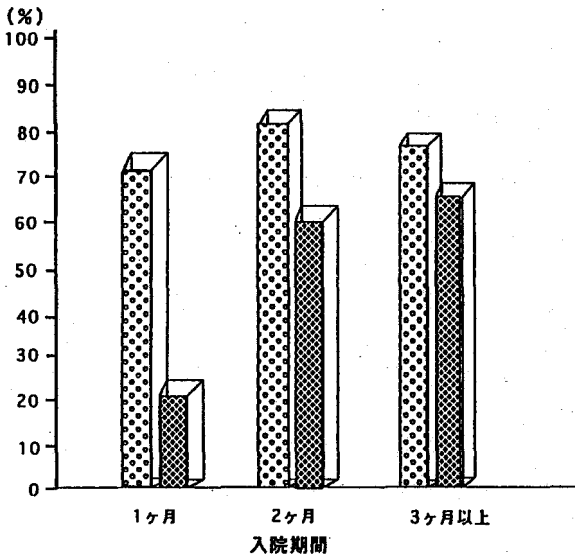


図5 呼吸器疾患 (■) と疼痛性疾患 (■) の入院期間から見た患者による臨床的評価

複合温泉療法が行われており、その直接作用、間接作用が観察されている⁴⁾。また、腰痛、リウマチ等の疼痛性疾患においては温泉プールでの歩行訓練、圧注浴、鉱泥湿布、牽引、マッサージなどの治療を行っており、水中での浮力による体重負荷の軽減、水の抵抗による筋力増強、温水による筋弛緩疼痛軽減、血行改善、精神的ストレス解消といった効果が観察されている⁵⁾。

この度、1998年1月～12月までの1年間に、当院で温泉療法を行った入院患者158例について、退院時に温泉療法の効果を患者の印象を中心に5段階で評価してもらい、疾患別でそれぞれの入院期間との比較を行った。対象は、呼吸器疾患78例(49.4%)、疼痛性疾患64例および、その他の疾患16例であった。その内訳は、呼吸器疾患では気管支喘息が最も多く、また疼痛性疾患では慢性関節リウマチ、腰痛症および膝関節症が多い傾向であった。また対象症例の地域分布では、鳥取県内からの症例は44例あったのに対し、県外、すなわち遠隔地からの入院症例は114例(72.2%)であり、県内に比べ遠隔地からの入院症例がかなり多く見られた。遠隔地としては岡山県、兵庫県、広島県、大阪府、東京

都、神奈川県などからの入院が多く、最も遠隔地としては鹿児島県、福島県からの入院症例も見られた。

臨床効果は、非常に良くなった、かなり良くなった、少し良くなった、変わらない、悪くなったの5段階で評価し、非常に良くなった、およびかなり良くなった以上を有効と判定した。まず、臨床効果を患者による評価で検討すると、呼吸器疾患では、有効例は78例中61例(78.2%)に見られた。一方、疼痛性疾患では有効例は64例中32例(50.0%)であり、呼吸器疾患に比べその有効率はやや低い傾向が見られた。しかし、疼痛性疾患では、“少し良くなった”の症例をいれると、その有効率は64例中61例であり、ほとんど全ての症例でなんらかの効果が期待できることも示唆された。また、その他の疾患では、有効例は、16例中11例(68.8%)であった。

全症例における患者自身の臨床評価を、やゝ客観的な看護婦による評価と比較してみるとほぼ類似した臨床評価が得られた。しかし、“非常に良くなった”の評価は看護婦による評価と比べ、患者自身による評価により多く見られ、患者自身の精神的な要素も加味されている可能性が示唆された。また、“かなり良くなった”の評価では、患者による評価よりも、看護婦による評価がやや多い傾向が見られたが、“少し良くなった”の評価は、患者、および看護婦による評価がほぼ類似した結果であった。

以上、呼吸器疾患および疼痛性疾患を中心に、温泉療法の臨床効果について検討を加えた結果、温泉療法はいずれの疾患にも有効であること、そして、呼吸器疾患に比べ疼痛性疾患では、温泉療法の効果出現までに、より長い期間が必要であることが示唆された。

参考文献

1. 谷崎勝朗, 周藤真康, 貴谷 光, 他: 気管支喘息の温泉療法—温泉療法の副腎皮質機能に及ぼす影響—. 環境病態研報告 60: 14-18, 1989.
2. 谷崎勝朗: 喘息の温泉療法. 近代文芸社

1994.

3. 谷崎勝朗, 周藤真康, 駒越春樹, 他: 気管支喘息の温泉療法 - 対象症例の年次推移 -. 環境病態研報告 57: 37-41, 1986.
4. 谷崎勝朗: 現代医療における温泉療法の意義

とその社会的要請. 岡大三朝分院研究報告 63: 110-116, 1992.

5. 岡本 誠, 芦田耕三, 山本和彦, 他: 腰痛症に対する温泉療法の効果. 岡大三朝分院研究報告 68: 51-58, 1997.

Clinical evaluation of spa effects for patients with respiratory disease and chronic pain disease

Nobuko Nishimura, Kayo Terasaki,
Sadae Yamamoto and Sumie Nakamura

Nursing Division, Misasa Medical Branch,
Okayama University Medical School

Clinical evaluation of spatherapy, mainly swimming and walk training in a hot spring pool and fango therapy, was performed in 158 patients (78 with respiratory disease, 64 with chronic pain disease, and 16 with other diseases) who were admitted at our hospital to receive spa therapy from January to December in 1998. The number of patients

over the age of 70 was largest, and the number of patients outside Tottori prefecture (72.2%) was larger than the number inside Tottori prefecture. Spa efficacy was assessed by 5 steps according to improvement of clinical symptoms; efficacy-marked, moderate, and slight, no efficacy, and worse. Spa therapy was evaluated as effective when their symptoms were markedly or moderately improved. The spa efficacy was 72.2% at 1 month, 81.8% at 2 months, and 76.5% at 3 months after spa therapy in patients with respiratory disease. In contrast, the efficacy was 21.1% at 1 month, 60.0% at 2 months, and 64.0% at 3 months after the therapy in patients with chronic pain disease. The efficacy was higher as the term of admission was longer in patients with chronic pain disease.